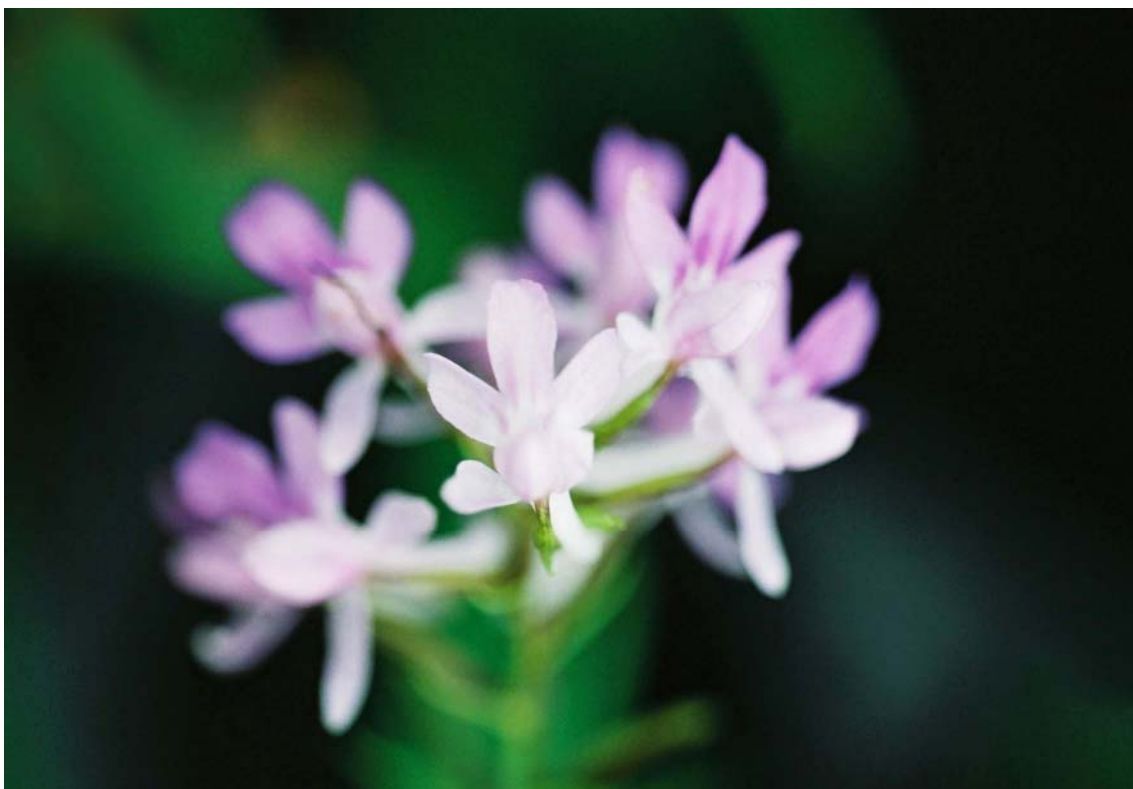


11) ウチョウラン=羽蝶蘭

ウチョウランはラン科の多年草で、関東以西の湿り気のある岸壁や民家の屋根などに着生する。高さは10~20cm、茎の下部には暗紫色の油点が多数あって、葉は広線形で、長さは3~10cm、幅は5cmほどで、茎の片側だけに数枚つく。夏、花径1cmの紅紫色の花を葉と同じ側に着ける。ウチョウランは地方変異が大きく、千葉県
の低山地帯に自生するアワチドリや、佐賀県黒髪山のクロカミラン、鹿児島県甑島
(コシキジマ)に自生するサツマチドリなどが亜種として認定されている。しかしどれも美しく可憐であるために、愛好家の収集対象になり、今では『絶滅危具種』に指定されている。和名は蝶が羽を広げたような花の形に由来する。別称としては岩上に着生するためイワランとか、コチョウラン(胡蝶蘭)、兵庫県の有馬付近に多く自生するためにアリマラン、セキラン、オオイワランなどとも呼ばれている。学名は『*Orchis graminifolia*』で、属名はこの花のイメージとは程遠く、ギリシャ語の睾丸の意味で、根茎の形状に由来する。種小辞は「禾本(加)状の葉を持つ」という意味で、禾本とはイネやムギ、ススキ、トウモロコシなどの総称で、イネ科の植物と同じような葉をしたという意味である。ウチョウランはもっぱら鑑賞用として栽培されてきたが、濫獲がたり、現在では人目に付くところで見るとはまず不可能である。

ウチョウランの歴史は、人間の欲望との狭間で特異な足跡をたどってきたと言っても過言ではない。昭和30年代ごろになると戦後の混乱期から解放され、一部の愛好家がウチョウランを栽培し、その栽培方法や繁殖の方法も確立されてきた。ところが昭和40年代以降になると、ウチョウランのブームが起り、ウチョウランの珍品や個体数が少なく美しい品種に対しては、投機の対象になってしまった。価格が高騰して来ると、これに目を付けた専門の採集人まで現れて、商業的な大量採集が行なわれるようになってしまった。このため野生のものはほとんど採り尽くされ、絶滅の危機を迎えることとなってしまったのである。

ところがこうした中で新しい繁殖技術が開発されてくる。昭和60年代になると無菌播種による人工的な増殖技術が確立されて、個体数の著しく少なかった品種も大量の繁殖が可能になってきたのである。このため1株で数十万円もした品種でも、その流通価格は年ごとに半値ぐらいに下降し始めて、投機の対象にはそぐわなくなった。こうしてウチョウランブームは終焉を迎えたのだが、これはチューリップ狂時代(01-01-03 チューリップの項参照)を彷彿とさせるばかりか、明治時代のヤブコウジブーム(06-01-07)をも連想させるものがある。現在ではどの品種も1,000円から2,000円程度である。しかしこの時代に失われた自生地の荒廃は回復されることなく、すでにこの世から失われた品種もあろうかと思われる。近年では近縁種間の交配や新品种の開発が進み、自然界では生存しない園芸種も生まれており、新たな問題も発生している。しかし何とかかつて自然界に生存した品種だけは再生したいものである。



ウチョウラン(栽培品)。それぞれに固有名がつけられているのだろうが、ここでは種類の豊富なこと、そして花が美しいこと、このために法外な高値で取引されたことを記しておきたい。



ウチョウラン(栽培品)の花の直径はせいぜい20mm程度である。



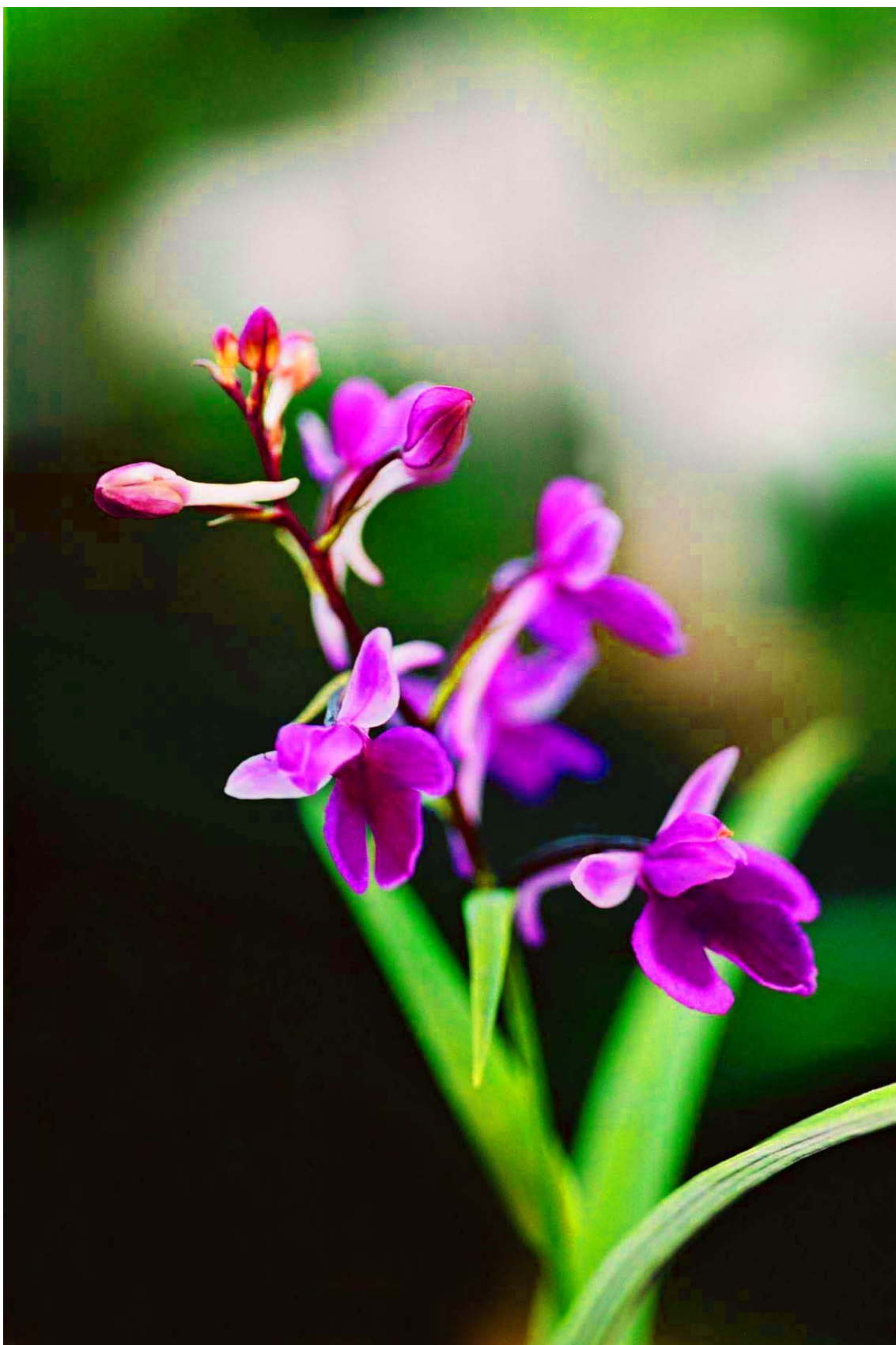
ウチョウラン(栽培品)。このために乱獲がたり、今では野生のものを見ることはできない。



ウチョウラン(栽培品) は、人間の愚かさを記録する植物の一つになってしまった。



ウチョウラン(栽培品)、しかし最近ではウチョウランの収集家もすっかり減ってしまった。



ウチョウラン(栽培品)、もともと生き物を商売の道具とすることが間違っていたのだろう。



ウチョウラン(栽培品)。このことは単に植物だけではなく動物に関しても言えることである。



生き物を大切にして増やすことは賛成だが、商売の具としてはならない気がする。

[目次に戻る](#)